

阪神大震災後 N.Z.で癒やされた…

次は私が

11. 3. 3 朝日新聞
阪神大震災の直後、被災した人たちを受け入れ、癒やしてくれた人々が、ニュージーランドのクライストチャーチにいた。

(佐藤卓史、長野佑介、富田祥広)

恩返しへの募金活動へ

1995年3月から7月にかけて、クライストチャーチの親日家団体が「疲れを癒やしてほしい」と費用の大半を負



肥塚公子さん(左)。隣の酒井香代子さんも阪神大震災後にクライストチャーチに招かれた。2日夜、神戸市須磨区、新井義顕撮影

担し、被災者69人を招いた。

「建物が崩れた中でどんな気持ちになるか、私もわかるから胸が詰まる」。神戸市須磨区の肥塚公子さん(69)は自宅が全壊。小学校などでの避難生活で、ヘルメットをかぶって暮らした。家族から「気分転換に行ってくれば」と勧められ、クライストチャーチの市街地に近いパーマーさん夫妻の家に滞在した。

花壇に色とりどりの花が咲き、家の脇でヤギがのんびり草をはんでいた。夫妻は肥塚さんを気遣い、2階の窓の大きい部屋を貸してくれた。

「張りつめていた気持ちを緩めることができました」

今回の地震後、電話をしたが通じなかった。「何とか無

事で、と願うしかない」

神戸市灘区の大学非常勤講師、長光太志さん(33)は震災時、高校2年生だった。自宅マンションが半壊し、避難所を経て母の勤めていた病院の独身寮に移った。親に勧められ、老夫婦宅に約10日間、弟と一緒にホームステイした。

老夫婦は絵を描いたり身ぶり手ぶりを使ったりして、一生懸命話しかけてくれた。最終日、兄弟で感謝を込めてカレイライスをつくった。「日常の感覚を取り戻せた貴重な経験だった」

約2週間、クライストチャーチなどに滞在した神戸市の女性(73)は「あれで前を向くことができた」という。被災者受け入れを新聞で知り、好奇心から応募。人なつこい街の人たちに、ふさいでいた気持ちが晴れていった。

16年前、日本側の窓口となった「日本ニュージーランド協会関西」(大阪市北区)は5、6、12、13日の午前10～午後3時、JR大阪駅と三ノ宮駅で募金活動をする。長光さんは「温かい気持ちを、今度はニュージーランドに届けたい」と話した。